

木村清孝著

## 『初期中国華嚴思想の研究』

### 一色 順心

本書は、初唐代に法蔵によって華嚴教学が大成される以前の華嚴思想に焦点を合わせ、中国佛教の一断面を明らかにしようとした力作である。従来の華嚴研究は、法蔵を中心とする教学の解明に向けられて、ともするとその教学体系の枠内にのみとどまりがちな傾向にあった。この現状の中で、近年、坂本幸男博士の『華嚴教学の研究』によって慧苑の教学が再評価された。そして、鎌田茂雄博士の『中国華嚴思想史の研究』・『宗密教学の思想史的研究』によって澄観・宗密の思想史的位置づけが明確になった。これらの研究について、このたび著者、木村清孝博士が世に問われた『初期中国華嚴思想の研究』では、『華嚴経』の伝訳以来、華嚴教学の確立に至る過程が、中国佛教思想史の全般的な流れの中で捉えられているのである。とくに、従来、法蔵に比較してあまり注目されなかった華嚴宗第二祖智儼の固有な思想的特徴が究明されている。本書における著者の研究の手は、佛教学のみならず中国哲学や東洋史学の領域にま

で延びている。加えるに、義湘や均如などの朝鮮華嚴からの新たな視点も導入して、幅広い学識に立った綿密な研究が展開されている。

本書の標題の中の「華嚴思想」ということばは、著者の指摘によれば、今まで華嚴教学と同じ意味で用いられたり、ときには「華嚴経の思想」を意味することもあって曖昧に使用されてきた。これについて、序文に、「しかし、『華嚴経』の思想と華嚴教学とがともに「華嚴思想」と呼ばれ、同義的に処理されるということには疑問がある。本書において筆者はとりあえず「華嚴思想」という語を「華嚴経にもとづいて形成された思想一般」の意味で用いることにし、上の二つの概念と明確に区別したいと思う。」と、概念規定されている。本書の記述内容に接したとき、まず気がつくことは、「華嚴思想」、「華嚴経」の思想、華嚴教学といった概念が、明確な区別のうえに使用されていることである。思うに智儼以前の華嚴思想の流れを跡づける作業は容易ではない。というのは、資料面での限界があるうえにこれまでの研究では未開拓な分野であったからである。智儼や法蔵による華嚴教学が確立するためには必ずそれ以前に、先駆となった思想があるはずであり、このことが、本書の前半においてみごとに実証されている。これを承けた後半は、智儼の思想の解明に、生きた解釈を与えることとなった。

さて、序文によれば、本書は、著者木村清孝氏が昭和五十年八月、東京大学に提出された学位請求論文であり、二年を経過して此に公刊の運びとなったものである。総頁数六百七十余頁

にも及ぶ『初期中国華嚴思想の研究』が公刊されたことは、まさに画期的なことであり同学の者はもとより多方面に互る研究者に裨益すること間違いない。

本書の構成は、二篇十四章で成り立っている。本書の記述内容を知らうに必要な項目を略示すれば次のごとくである。

## 第一篇 華嚴の思惟の形成

### 第一章 『華嚴經』の伝訳

### 第二章 華嚴經研究史概観

### 第三章 華嚴經学習者の実践的立場

### 第四章 華嚴經観の展開

### 第五章 偽經と『華嚴經』

### 第六章 華嚴經思想の受容

### 第七章 華嚴教學への道

## 第二篇 智儼とその思想

### 第一章 杜順から智儼へ

### 第二章 智儼伝の解明

### 第三章 華嚴經観の特質

### 第四章 二種十佛説の成立

### 第五章 海印三昧

### 第六章 法界縁起説の原型

### 第七章 成佛道の実践

上記の他、各章に序と結びがあり、多くの節に分かれている。なお本書の末尾には、事項・人名・書名・梵語の索引と英文梗概がある。

## 二

以上のような項目の順序にしたがって、本書の内容を簡約して紹介してみたいと思う。

第一篇『華嚴の思惟の形成』は、『華嚴經』が中国に伝訳されて以後、初唐代に華嚴教學が成立するまでの間に、中国佛教学者が『華嚴經』とどのように取り組み、それから何を吸収し、いかなる思想を形成していったかを明らかにするとともに、華嚴教學の誕生に至る経緯を考察したものである。

第一章では、最初の漢訳『華嚴經』、いわゆる『六十華嚴』が初めて中国に伝えられ、漢訳された事情について、『出三蔵記集』の『出経後記』などを通して明らかにされる。また、『六十華嚴』訳出以前にも多くの漢訳華嚴經類が存したことは法蔵の『華嚴經伝記』巻一に詳しいが、著者は、諸の経録を精査することによってこれら同類の經典を再検討している。「法蔵の記載する華嚴經類がすべてそのまま信用できるものではない」(一一頁)という指摘がなされている。

第二章では、『華嚴經』の伝訳以後、ほぼ隋代までの華嚴經研究の流れを広く概観し、その基本的性格を探る。まず北方においては、地論學派の形成以後、華嚴經研究は慧光をはじめとする南道派の人々を中心に興隆・發展した。ところが地論學派とは別の系統の人にも『華嚴經』を研究する人があった。一方南方における華嚴經研究の主流は、三論學派の人々であり北方とは別の研究伝統が存続していたことになる。やがて北周の廢

佛を契機に、北方の地論学と、そのころ出現した南方の撰論学との交渉が深まり、隋の興起とともに撰論学が北方に伝えられると、『華嚴經』の研究にも新しい方向が芽生えた。撰論学派の中、華嚴經研究を行なった人に曇遷がいた。以上のような華嚴經研究の流れが、『高僧伝』や『続高僧伝』の記述を通して明らかにされている。

第三章では、前章が『華嚴經』の学習・研究を学問的系譜において位置づけたのに対して、これを実践的立場において理解しようとする。すなわち、伝記資料が『華嚴經』に取り組んだことを伝える中国の佛教者たちが、どのような信仰を持ち、『華嚴經』にどのような主体的な関わりをしたかを論じている。

第四章は、隋以前の中国佛教において『華嚴經』が、教判上どのように位置づけられ、どこにその思想的本質が見出されたかを、教判と宗趣との二面にわたって明らかにする。著者は、智儼以前の諸の教判を年代順に整理している。そして『華嚴經』の教判論的位置づけを要約する。(一)『華嚴經』はその伝訳以後、大体一貫して高い地位を獲得し続けた。(二)内容的に見ると、諸の教判における『華嚴經』の具体的位置づけの仕方がかなり個性的であり、中にはのちの華嚴教學の理解につながるものが見出される。このような二つの特質を導き出したのである。次に著者は、法藏・慧苑・澄観が、『探玄記』一・『判定記』一・『華嚴經疏』三に紹介する諸師の宗趣説を図表化し、これを参照しつつ各の宗趣説を解説している。

第五章は、中国佛教の一特質を示す偽經が『華嚴經』とどの

ように関係し、『華嚴經』から何を摂取したかを追求している。『華嚴經』の影響が強い現存の偽經としては、『大方広佛華嚴十惡品經』一卷・『像法決疑經』一卷・『究竟大悲經』四卷(ただし卷一を欠く)・『法王經』一卷・『梵網經』二卷・『菩薩瓔珞本業經』二卷がある。著者は、これら六種の偽經を逐次詳述したのち、『華嚴經』の受容の仕方を、次のごとく三種のタイプにまとめている。

一、『華嚴經』の名を借りて經典としての權威を高めようとしたと考えられる偽經(『華嚴十惡品經』)。  
二、『華嚴經』の形式・構想を取り入れた偽經(『梵網經』)。  
三、『華嚴經』の思想のあるものを受容した偽經(『像法決疑十經』・『究竟大悲經』・『法王經』・『菩薩瓔珞本業經』)。

第六章では、現存する諸の著作を通して、南北朝から隋唐までの間に生じた中国佛教者の思想の中に、『華嚴經』の教説がどのように取り入れられたかを探っている。その佛教者としては、曇鸞・慧影・慧遠・智顗・吉蔵の五人が検討されている。周知のように彼らはいずれも『華嚴經』を所依の經典としたわけではない。にもかかわらず『華嚴經』の思想が主体的に受容されている。本章の叙述は一六五頁にも及ぶのであるが、とくに吉蔵の「無礙」の思想が『華嚴經』の教証によって形成されたという指摘は著者の卓見であると思う。

第七章は、杜順・智儼以前の中国佛教の中に、華嚴教學的思想の萌芽と、華嚴教學形成の思想的基盤を追求した章である。北魏の曇升の『華嚴經論』百卷は、計十二卷分が現存するのみ

である。そこには「一即一切」の思想が見られる。『広弘明集』巻二十九に所載の慧命の『詳玄賦』には、すでに「理」と「事」の概念が提示されている。曇遷の『亡是非論』には、智儼における「性起」の性格を考えるうえで重要な意味がある。また、本章第四節地論南道派の「法界縁起」思想に詳述されるように、華嚴教学の中心的教説である「法界縁起」思想の基本的網格が、すでに法上と慧遠の思想の中に相当程度でき上がっていた。以上のような興味深い指摘が与えられている。

## 三

第二篇「智儼とその思想」は、中国華嚴宗の第二祖とされる智儼の華嚴教学を思想的に解明したものである。智儼の教学の概要は高峯博士の『華嚴思想史』（一五五～一八七頁）や『華嚴孔目章解説』などに、また智儼の宗教の思想的役割については鎌田博士の『中国華嚴思想史の研究』（七九～一〇六頁）によって明らかにされてきた。本篇では、これまでの智儼研究をふまえて、彼の佛教者としての主体性に目を据え、広い思想的視野においてその思想を究明している。

第一章は、智儼の師、華嚴宗の初祖杜順についての研究である。従来、杜順の撰述とされてきた『法界観門』の問題を、(一)『法界観門』本文とその異同、(二)思想的性格、(三)出現の時点、(四)撰者について、という四つの側面から考察している。とくに撰述者をめぐっての問題が広く扱われ、本章の末尾に、「筆者には、上述したような思想的状況を考慮すれば、具体的にその

抜抄者を推定することは困難であるとしても、八世紀後半までに誰かが『發菩提心章』からとくに実践的な意味で重要な一部を抜き出して「法界観門」と名づけ、これを杜順撰に帰したということは、あながちありえないことではなかったと思われるのである。」(三六四頁)と推定された。『法界観門』を杜順撰と断定することに疑問を投げかけたものといえる。

第二章では、智儼の生涯を、主に法蔵の『華嚴経伝記』の智儼伝によって解明し、かつ彼の生きた初唐時代の社会的背景についても研究の目が向けられる。智儼の学問の性格を論ずる中、彼には天台智顗や三論宗の吉蔵と一つの「中国佛教」的な思想を共有する一面があるということ、彼の『金剛般若経略疏』の三種般若を手掛かりとして明らかにしている。著者は、諸資料に見える智儼の撰述書を紹介し、著作の真偽の検討を行なっている。真撰書と認めてよからうと思われる七種の著作の製作年代についてもふれている。その七種とは、『搜玄記』・『五十要問答』・『孔目章』・『一乗十玄門』・『金剛般若経略疏』・『無性釈撰論疏』・『供養十門儀式』である。

第三章は、第一篇第四章を承けて、智儼が『華嚴経』をいかなる經典と捉え、従来の見方をどういう形で乗り越えようとしたかを論じている。(一)教判における『華嚴経』の位置づけ、(二)『華嚴経』とその姉妹經典とも称しうる『菩薩瓔珞本業経』・『梵網経』との比較、(三)經名の解釈、(四)宗趣の把握、という四つの問題を通して、彼の華嚴経観を考える。そして初期より晩年にかけて智儼の『華嚴経』の把握そのものに発展があること

を明らかにしている。

第四章は、智儼における佛身觀の確立過程を解明した章である。『華嚴經』には、しばしば十佛・十身が列記されるが、晩年の彼の著書『孔目章』に至って、各種の十佛・十身の中から「行境の十佛」と「解境の十佛」という二種が選びとられた。著者は、この二種十佛説の背景とその成立過程の問題を、中國佛教全般にみられる佛身觀の潮流にも目を向けつつ究明している。

第五章は、華嚴教學の根本定といわれる海印三昧に智儼がどう注目しているかを明らかにしている。第一節では、彼が読んでいたことが明白であり、かつ海印三昧に内容的な解説を加える三つの經典、すなわち『大集經』『大般若經』『六十華嚴經』に限って、海印三昧の意味を探索。次節に、彼の諸著作を通して智儼の海印三昧論を眺める。根源の世界を海印三昧に見、海印三昧のはたらきとして一切を捉えるというあり方は、晩年になるにしたがい主体的に徹底されていった。なお、本章では、『法界図記叢髓錄』下一において智儼が説示したと伝えられる五海印説の紹介もある。この説がはたして彼の真説であるか否かは速断できないとしても、智儼の海印三昧の問題や義湘系華嚴の海印三昧を考えるためには不可欠な資料であり、従来、全く注意されなかったテーマである。

第六章では、智儼の法界緣起説の全容と、それがもつ意義を考察している。まず、彼の解釈した「法界」の概念を一瞥した

うえで、次に、『搜玄記』の『六十華嚴』十地品第六地の注釈中にみえる法界緣起説が綿密に検討される。これは、「凡夫染法」と「菩提淨分」との二種に分ける緣起説であって、法界緣起が衆生の実践や、妄心との関わりにおいて論じられているので、同教的な法界緣起といえる。それに対して、次の「一乗十玄門」の法界緣起説は、一乗の緣起であり眞実そのものの緣起であるから、別教的な法界緣起である。このように異なった視点に立つ両者の法界緣起説を論理的に解説する中で、著者は、智儼の法界緣起の形成の背後に、深い発想の基盤と大きな思想的背景が存することを明らかにしている。また、智儼における「六義と六相」及び「性起」の問題も、彼の緣起説と密接な関係にあるため、本章に論述される。なお本章は、第一篇第七章と深く関連している。

最後の第七章は、智儼の実踐論を扱った章であって、彼の「成佛」説と觀法とが当面の課題になっている。「成佛」説の確立過程が、一乗の成佛、一念成佛、疾得成佛の三つの側面から位置づけられる。智儼が、教判論的視点にとどまる「成佛」説から、晩年の『孔目章』に見られる「無念疾得成佛」へと、自覺を深めていった推移が立体的に眺められている。この成佛道をふまえて、智儼の言及する觀法の種々相が明らかにされているのである。

(昭和五十二年十月、春秋社、菊版六七二頁、八五〇〇円)